

頭痛 肩こり 樋口一葉

井上ひさし



頭痛 肩こり 樋口一葉

井上ひさし





©1984
Hisashi Inoue

頭痛肩こり樋口一葉

定価六五〇円

昭和五九年四月一〇日 第一刷印刷
昭和五九年四月二五日 第一刷発行

著者 井上ひさし

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ二〇

郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八一二八四二
電話番号 販売部 (〇三) 二三〇一六一七一

印刷所 凸版印刷株式会社

頭痛肩こり樋口一葉*目次

一	ぼんぼん盆の十六日に	9
二	借金 of 申し込み	39
三	花蚩が生者たちの会話に加わった夜	55
四	明治二十六年のジャンケンポン	73
五	火葬場の煙	93

六 お月さまはエライな

109

七 めぐりめぐって

127

八 世の中全体に取り憑くことはできない

151

九 夏子の新盆

169

十 エピローグ

179

装幀
安野光雅

頭痛肩こり樋口一葉

とき

明治二十三年（一八九〇）樋口夏子十九歳のときの盂蘭盆から、明治三十一年（一八九八）の彼女の母多喜の新盆まで。場面は、一つの例外を除いて、いずれもそれぞれの年の盆の十六日。時刻は例外なく、夕方から夜にかけて。

ところ

芝西応寺町六十番地樋口虎之助（夏子の次兄）の家、本郷区菊坂町七十番地樋口夏子の借家、同六十九番地樋口夏子の借家、下谷区竜泉寺町三百六十八番地樋口夏子の借家、そして本郷区丸山福山町四番地の樋口夏子の借家の五箇所。

ただし観客の目に入るのは、つねに二間とその前の庭だけである。

もつとも竜泉寺の借家には「前の庭」はないが。一ト間にはきまつて
仏壇がある。この仏壇は全幕を通じて同じものでなければならぬ。

ひと

樋口多喜^{たき}（五十七）

夏子（十九）

邦子（十七）

稲葉^{いなば}鑛^{こう}（三十四）

中野^{なかの}八重^{やえ}（二十三）

花^{はな}蛸^{ぼた}（二十七）

なお、年齢は、いずれも、劇がはじまったときのものである。また、
俳優は自分の扮する人物の年齢にそれほど忠実である必要はない。

一

ぼんぼん盆の十六日に

一 ぼんぼん盆の十六日に

暗い中から、少女たちによる、童謡調^{わらべうた}の、盆の練り歩き唄が近づいてくる。

ぼんぼん盆の十六日に
地獄の地獄の蓋があく
地獄の釜の蓋があく
ぼんぼん盆の十六日に
地獄の亡者^{もろじや}が出てござる

なんなん並んで出てござる

盆提灯ぼんちようどんを点ともしましよ

胡瓜きゅうりの馬なすに茄子の牛

瓢箪 酸漿はつすき 飾りましよ

ぼんぼん盆の十六日に

御先祖様ごせんざさまも出てござる

サンサンゴゴに出てござる

ぼんぼん盆の十六日に

無縁むえんぼとけ仏も出てござる

成じようぶつ仏したやと出てござる

盆燈籠ぼんとうろうを点しましよ

お団子 素麵そうめん 青林檎あおりんご

瓜も西瓜も供えましよ

ぼんぼん盆の十六日に……

練り歩き唄が後半にさしかかったあたりから、たつぷりと時間をかけて、じつにゆっくりと、舞台に照明あかりが入ってくる。そこは明治二十三年（一八九〇）七月十六日の夕刻、芝西しさい応寺町六十番地の樋口虎之助（夏子の次兄）の家。

下手に仏壇のある居間。畳が赤茶色に灼けている。仏壇の横に盆棚と丈の低い盆燈籠。縁側の軒先にも盆提灯が吊ってある。上手の部屋は薩摩焼陶器の焼付け絵師である虎之助の仕事場をも兼ねているらしく、出来損いの薩摩焼の花瓶が五、六瓶、隅に並べてある。

下手縁側の階段石の上に、足を洗うための小さな濯すすぎ盥。邦子（夏子の妹。十七。正しくは、くに）が手桶の水を柄杓で、その濯すすぎ盥へ移している。

下手から、これからの劇の中で人生の修羅模様を織り出すことになる登場人物たちが可憐

な少女に扮して、練り歩き唄を歌いながら入ってくる。少女たちの数は五人、いずれも小さな丸提灯をさげ、帯のうしろに団扇をさしている。邦子、少女たちを笑顔で迎えて、

邦子　ごくろうさま。

ト軒先の盆提灯を縁側におろす。まもなく夏子を演じることになる少女が、自分の提灯から樋口家の盆提灯へ火を移す。その間に邦子は一厘銅貨を少女たちに配る。夏子を演じることになる少女を一人のこして、少女たちは練り歩き唄を歌いながら上手へ退場。

邦子　あなたにもお駄賃。はい、一厘。

少女　ありがとう。この盥の水で仏様が足をお洗いになるんでしょう。

邦子　そうよ。

少女　おねえさんちには、だれの御魂^{みたま}が帰ってくるの。